

La inmortal

タイトルイモータル いつまでも忘れない La Inmortal

著者リカルド・ルイス = ガルソン Ricardo Ruiz Garzón

出版社エデベ - ドン・ボスコ Edebé-Don Bosco

出版年 2017年

ページ数 200ページ

読者対象小学校高学年から

レポート作成 宇野和美

概要

歳の女の子。いつもおじいちゃんで行く公園でチェスをしているイラン人のミスター・アリヤットが、テロリストの容疑で逮捕されてしまった……。チェスの魅力を伝えつつ、難民という社会問題に子どもが立ち向かう姿を描いた意欲作。2017年エデベ児童文学賞受賞。

主な登場人物

ジュディ：もうすぐ12歳の少女。母親、祖父と暮らす。画家の父はハンガリーに行ってしまったまま。

ミスター・アリヤット：バスティオン公園で毎日チェスをするイラン人。不法移民らしい。

あらすじ・内容

ジュディはまもなく12歳になる女の子。スイスのジュネーブに住む。画家の父親の血をひいてか、絵が得意だ。

月に行われる大きな絵画コンクールのために、スケッチの練習に余年のないジュディだが、ある早春の午後、「チェスを知らないといい絵描きになれない」と人に言われてチェスに興味を持つ。そして、おじいちゃんからチェスの手ほどきをうけると、めきめきと腕をあげ、チェスのおもしろさに目覚めていく。公園に来ると、絵も描きつつ、いろんな人とチェスをするようになる。

分でジュディは負けるが、終わったとき、ミスター・アリヤットはポケットから紙をとりだし、「シャトランジ」という謎の言葉を書いてジュディに渡す。

帰宅後、ジュディがおじいちゃんとインターネットで調べてみると、それは「王のゲーム」の意味のチェスの古い名だった。

年前からはジュディにメールアドレスを作って、罪悪感にさいなまれつつ、父親になりすましてメールのやりとりを続けている。

ジュディはその後、ミスター・アリヤットとしばしばチェスをするようになった。数分で負けてしまうのだが、そのたびにミスター・アリヤットは紙きれに言葉を書いたメモをくれる。そして、その言葉を家で調べるたびに、ジュディのチェスの知識と興味が深まっていく。

たとえば「ポルガー」は、はじめて女性でチェスの世界チャンピオンとなったユディット・ポルガーのこと。ハンガリー人で、15歳でグランドマスターになった。

「リナレス」は、スペインにあるチェスの聖地の名前。「キャロル」は、『不思議の国のアリス』を書いたルイス・キャロル。「フィッシャー」は、有名なチェスプレイヤーだ。

「ファヒム」とは、バングラデシュの難民だがチェスで才能を発揮し、フランスで受け入れられた少年だった。ミスター・アリヤットも、国を追われた身なのだろうか。

そうこうするうちに、ジュディは絵画コンクールの予選を通過し、本選に出場できることになり、絵の練習にも打ち込んでいく。

そんなある日、公園でミスター・アリヤットが警官に連行される。パリとブリュッセルのテロ事件のあと、ジュネーブでも外国人のとりしまりがきびしくなっている。ジュディのおじいちゃんをはじめ公園にいた人々は、押しとどめようとしたが無駄だった。ミスター・アリヤットは不法移民かもしれないが、テロリストではないというのに。

なんとかミスター・アリヤットを救えないか、いつもチェス盤のまわりに集う人々は考えこむ。そのとき、ミスター・アリヤットにもらった紙きれを見ていたジュディが、その紙が市内のフルシェットというレストランのものだと気づく。ジュディたちがたずねてみると、そこは、ミスター・アリヤットの息子のアミールが営むイランレストランだった。

アミールの話では、ミスター・アリヤットはティコル収容センターに入れられたらしい。ミスター・アリヤットには、ジュディと同じくらいの年の孫息子がいる。アミールは、レイキャビックで対戦したとき、あのチェスチャンピオンのフィッシャーがアリヤットに贈ったというチェス用の時計も見せてくれる。そのときジュディは、ミスター・アリヤットを助け出すアイデアを思いつく。市民の力がバングラデシュ難民のチェスの名手の少年ファヒムを助けたように、自分たちの手でミスター・アリヤットを救いだすのだ。

歳の誕生日を祝わないし、誕生日と同じ日に開催される絵画コンクールにも参加しないと宣言して、マスコミにもとりあげてもらわないのだ。

公園に集うチェス好きの大人の手を借りて、スイスのチェス協会に協力を頼み、ジュディは対戦を実現させた。メディアで話題になるよう、報道関係者にも声をかける。またジュディは、女性チェスプレイヤーのユディット・ポルガーに手紙を書き、元バングラデシュ難民のファヒムにも連絡をとって、応援を頼んだ。

時間だけ。終わらなければ翌日に続く。イラン難民の自由を求めて立ち上がった少女として、ジュディのことは、テレビやインターネットニュースで大きくとりあげられる。

ジュディの行動を支持するグループと難民の受け入れに反対するグループの衝突も起きる。見守る人々の中に、ユディット・ボルガーやファヒムの姿もある。

対戦の途中で、ハンガリーからジュディの父がやってくる。父は、チェスの対戦が長引いてもジュディが絵画コンクールに出られるようにと、コンクール事務局とかけあって絵画コンクールの本選をティコルセンターで行うよう話をつける。だが、父親がこの出来事の話題性を利用して世間の注目を集めようとしただけで、娘を思っているわけではないことをジュディは見抜く。定められた時間内に絵を描くという本選で、ジュディは絵を描かず、ミスター・アリヤットを解放してもらうためのアピールをする。

日目、ミスター・アリヤットとジュディの引き分けに終わる。その後、法務省の役人がやってきて、ミスター・アリヤットを釈放し、滞在の合法化の手続きをとると告げる。ジュディとミスター・アリヤット、おじいちゃんたちは抱き合って喜ぶ。

年にアドルフ・アンデルセンとキゼツキー・キャンピットの間の歴史的対局「イモータル・ゲーム」。このゲームを、ジュディのことをいつまでも忘れないという意味だろう。

ジュディは最後に、父親になりすましてずっと力になってくれたおじいちゃんに、感謝のメールを出す。

所感・評価

社会的テーマと個人的テーマをうまく組み合わせた、小学校高学年向けのリアリスティックフィクション。

歳の自分に何ができるか、主人公が手探りし、前に踏み出していくようすは爽やかで、応援したくなる。国を追われて他国に住むようになった難民が、特別な存在ではなく隣人として描かれている。いわれのない差別やヘイトスピーチについて考えるきっかけを与えてくれるだろう。

チェスもこの物語の大切な要素になっている。読者はジュディとともに、ヨーロッパの伝統でもあるチェスの世界に自然に入っていける。日本ではなじみが薄いですが、チェスが、人種や宗教を問わず、世界中で行われている競技であることもわかって興味深い。

認定書類を持たないことからミスター・アリヤットがテロリストと疑われることと、ジュディが、血のつながりをもとに父親を求めていたことは、ストーリーの中で呼応しあっているようだ。制度や書類上の事実と、物事の本質は必ずしも一致しない。だからこそジュディは、自分の描いていた父親像が幻想でしかないことを知り、父親の問題をのりこえていく。

ジュディのことをいつも見守り、愛してくれるおじいちゃんのおたかさは、読者の安心感につながる。信頼できる大人の大切さが描かれている。

歳から」。中学生以上に向けた作品ではないからか、難民についての詳しい背景説明はない。だが、社会的問題に興味を持たせること、小学生でも行動を起こせることに気づかせることには、十分成功していると思う。

人称の語り手によって語られ、この語り手が公園のチェス盤のポーンの駒のひとつだったことは、物語の最後までわからない。

を読めばすべて明らかになるのがわかってきて、先を読み進めたいくなる。つまり、ミステリアスな構成が、読みすすめさせる推進力にもなる。

Bの部分の書体を変えるなど見た目を工夫し、事実関係をよく整理して読者に提示することが要求されるだろう。

だが、難点がまったくないわけではない。おじいちゃんが公園の友だちに、ジュディに関する自分の悩みを打ち明けるシーンなど、大人の視点で描かれている箇所がある。スペインの作品ではありがちだが、日本ではなじまない向きもあるだろう。また、登場人物同士の会話で背景が説明される部分がやや多い印象も受けた。

人称に近くなっている部分がある。公園のポーンが見ているはずのない、公園以外で展開するシーンが、見たことのように描かれているのは、疑問を抱かせるかもしれない。だが、ポーンを語り手にしたことは、詳しい背景の説明を自然に回避する有効な仕掛けになっていると思われる。

とはいえ、日本では描かれにくいテーマは新鮮で、ヨーロッパの作家ならではの視点を感じられ、物語は子どもを引き込む力もある。ぜひ翻訳出版を検討してほしい作品である。

試訳（冒頭部分p.11～12）

1、土曜日

「チェック！」

ジュディはにっこりする。ミスター・アリヤットったら、ずいぶんうまく言ったじゃない、と言うように。そう、ずいぶん。なまっているし、息の音が強すぎるけれど、いつもよりずっとわかりやすい。白いターバンを巻いた頭の下で、イラン人のミスター・アリヤットもにっこりし、黒々とした濃い口ひげをなでる。が、次の瞬間、また駒に神経を集中する。

チェス盤の反対にある黒の側で、ジュディはため息をつき、くちびるをかむ。ハイカットのスニーカー、ダメージジーンズに、シャツを外に出したかっこうで、実際より年上に見えるけれど、まだ、もうすぐ十二歳。正確に言えば、あと一週間で誕生日だ。

何メートルか先にある金属の柵のむこうで、おじいちゃんがネクタイをなおして、まゆげをもちあげる。気持ちを入れると言っているのだ。チェックされたのだから。チェスの試合では、キングがいつも守られるようにしておくのがいい。

それに、これはただのゲームじゃない。

これまでジュディがミスター・アリヤットとしたうちで、一番大事な対局だ。

終わったとき、どちらの未来もすっかり変わってしまうかもしれないのだ。

だから、何十人もの人がまわりで見ている。

それに新聞記者、テレビカメラも。有名人もいる。それに警官。おまわりさんがいっぱいだ。

こわくて、にげだしたいくらいだ。

でも、ぼくにはそれができない。

Source URL: <http://www.newspanishbooks.jp/read-report-jp/la-inmortal>